

里地通信 11月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階(財)水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

(財)イオングループ環境財団 里山保全活動

ケビン・ショートさんと 素敵なカントリーサイド・里山で遊ぼう。 横浜自然観察の森



幕末以降、多くの西欧人が日本を訪れその美しさに感嘆しました。その多くは、日本の里と里山、そして農夫たちの勤勉さと彼らが織りなす山の手入れ、田畑、畦や小道の調和、そして何よりも、自然と共生していた暮らしがもたらした美しさのように思えます。

「日本の農耕法が簡単で、しかも優れていることは従来多くの旅行者によって指摘され、称賛されたが、われわれも自分の目でそれを確かめることができた。...米(稲)は、主として河川沿いの地域に栽培される。しかし土質の許す限り、それ以外のどいう土地でも稲田はつくれる。...急流の水や丘から流れ落ちる水も、巧みに作られた無数の堀によって稲田の中に自在に引き込まれている。丘の麓には、薩摩芋、小麦、綿、胡麻、...その他の野菜がつけられている。...世界中のどこを探しても、日本の農夫ほどに自分の田畑の耕作に精をだす者はいない。彼らが田畑を耕す熟

練、勤勉、そして入念さはまことに称賛に値する、

(新人物往来者刊「イタリア使節の幕末見聞記」V・F・アルミニオン著、大久保昭男役より抜粋)

伝承されてきた日本の里と里山は、崩壊の危機にさらされていますが、今もなお、外国人の目からは美しく、さまざまな生き物たちの宝庫に写ってみえることでしょう。そういう私自身も、子どもの頃に遊んだ原風景の中に、外国人に似た驚きや感嘆を覚えずにはいられません。

9回目のイオングループ里山保全活動は、外国人の目から写った里山を、ケビンさんの眼を通じて、子ども達と一緒に遊んでみました。

場所は、横浜自然観察の森。横浜市金沢区から鎌倉市にむけて広がる里山は、現在も横浜市や鎌倉市の手によって保護条例などにより開発の手からまぬがれてきました。この都市にしてはめずらしい広大な里山に、ケビンさんを招いて、子ども達に里山の魅力と自然観察の楽しみを伝えてもらいました。

ケビンさんは、1949年ニューヨーク生まれ。職業軍人としてベトナム戦争の際に来日後、アラスカ大学、スタンフォード大学を経て、北海道大学へ。専門は文化人類学ですが、昆虫博士、植物博士として、また、里山のスポークスマンとして、全国各地の里山を飛び回っています。

まずは、屋内で横浜自然観察の森のレンジャー今永さんが『どんぐりコロきち』の紙芝居を上演。イオングループの里山保全でも「鳥海山」「三瓶山」で紙芝居ワークショップを行ってきましたが、ここはその本家本元。軽妙な語り口で子ども達のハートをとらえていきます。



続いてケビンさん登場。スライドをまじえながら、ケビンさんのフィールドである千葉県印西周辺の里山のお話。そして、折りたたみの網、図鑑、スケッチブックなど7つ道具の紹介。軽妙な語り口に子どもたちは身を乗り出しています。

ケビンさん手作りの昆虫と植物のぬりえのシートが紹介されたときには、子どもたちは我先にとステージへ駆け出していました。ガラガラヘビの頭の部分の剥製が登場した時も、ヘビという怖がるはずの子どもたちは、興味津々でヘビの怖さなど吹っ飛んでしまっていたようでした。



そして、いよいよ野外での観察会です。参加者が60名程と多かったので、2チーム編成となりました。ケビンさんの観察会を待つチームは、あらかじめ横浜自然観察の森のレンジャーの方々が集めておいてくれた竹、蔓など材料に工作を行いました。子どもたちは大人の補助を受けつつも、のこぎりで竹を玉切りし、キリで穴を開け、ヒモを通して「パカパカ馬」やリースなどを短時間で作り上げていきました。

ケビンさんの観察会は1チーム30名ほどの大集団でした。出発早々にケビンさんは、道端で「ひつつき虫」と呼ばれる、草の花をもぎっては、子どもたち服めかけて、投げつけます。花が服については喜んでます。子どもたちもケビンさんの攻撃に応戦。子どもたちの多くが参加してきたところで、その草花の説明が始まります。

そしてまた歩きはじめ、小道にはえているオオバコを発見。「貴重な薬草ね。子ども達のおもちゃになるヨ。日本では相撲。アメリカでは機関銃ね。」まずは、参加者のひとりとオオバコ相撲。「あ～負けちゃったあー」。そして、すぐ「機関銃だあ。ダダダダッ...」とオオバコの穂状花序を飛ばしていきます。それを見て子ども達も「ダダダッ.....」と真似していきます。

次には、「ムカゴないかなあ、ムカゴ、ムカゴ.....」と食べもの探しです。あるお母さんがムカゴを見つけました。蔓にたくさんぶら下がっている小指の爪ほどの大きさのムカゴです。形はジャガイモのよう。ケビンさんの勢いにつられ、大人も子どももむしっては、



そして「カマキリがエサを食べるときはね...」と左腕大きく振ったかと思った瞬間隣にいた子どもを素早く左腕で抱え込み、「こうやって食べるね」。子どもたちは一瞬ビックリしたものの、次の瞬間にはニコニコとケビンさんのカマキリの話に夢中になってしまっています。「僕の田舎では、カマキリを殺すと罰金。益虫だからね」とカマキリなどの昆虫が農作物にいい影響をもあることを伝えて行きます。

バッタとキリギリスの違い、わかりますか？

いい、わかりますか？

バッタ、眼が大きいね.....。キリギリス、眼が小さいね.....などと。説明が終わらないうちに子どもたちも、一緒にやってきたお母さんお父さんたちも原っぱいっぱいに散って、網を振り回したり、手でつかんだりしてバッタやカマキリを次々につかまえては、ケビンさんのところへ持ってきます。つかまえてきたバッタの羽を広げてケビンさんの解説。観察そして遊んだ後には「ありがと！クルマバッタモドキ様。僕はバッタ好きね。ここ、いい原っぱね」と、観察させてもらった感謝を述べ、野に放ちます。

「観察会はね、まったくの素人でも楽しめるようになっています。だって2～3時間で伝えられるものは限られているから、情報を与えるよりも感動を共有することのほうが重要でしょ。楽しい思い出に残るようなものでなければ役に立たないからね。身近な自然はこんなに楽しいという気持ちを伝えることが大切。どこにでもあるものを題材に、観察する楽しさ、ものをよく見る習性を伝えていきたい」とケビンさん。

「里山は宝の山ね。観察会は楽しいヨ！」

楽しみを知ると、みんな里山を大切にすね。

また観察会しようネ」

口に運びムシャムシャと食べていきます。「結構美味しい！」の声に、「ムカゴご飯にするととってもおいしい」とあるお母さん。

ムシャムシャとムカゴを食べながらも、アカメガシワの葉の裏を見せて、「甘い蜜をだすね。蟻（アミメアリ）が蜜をなめているでしょ。蟻がいると他の虫が葉を食べにこない。共生ね。」

昆虫はケビンさんの最も得意とするところ。くもの巣を発見し、大きなクモに子どもたちはビックリしています。ケビンさんは、そーっと手をクモへ伸ばし、クモを手の平に乗せていきます。子どもたちの「痛くない？ 噛まない？」の声にケビンさんは「全然イタクナイ。呪文をかけるから」「蜘蛛と遊んだらもとの場所に返すんだね。ありがと。」

子どもがカマキリをつかまえケビンさんに見せにきました。子どもの人差し指と親指で胴をつままれているカマキリは激しくもがいています。ケビンさんはそのカマキリを手の甲で受取りました。カマキリはジューツとしていて逃げようとしません。「人間につかまったことを感じていないね。ゆっくり見れるでしょ。」

トキの野生復帰をめざして

共生と循環の地域社会づくりシンポジウムと 環境庁のモデル事業について

里地ネットワーク事務局では、設立時より2年半の間、「人と人、人と自然の共生」「循環・共生・参加・国際的取り組み」「環境保全型技術」「森の再生、川の復元、住民自治の仕組み」「ツーリズム、産品開発」「教育と共育の違い」などの個別プロジェクトを通じて、循環型社会の将来像に関する調査研究を行ってきました。

この背景には、モンスーンアジアの中での水稲稲作文化、日本古来の素晴らしい里の文化、すべてのものを循環させてきた森の文明、四季折々の変化の中で培われてきたさまざまな生活文化や食文化、そして、「もったいない」の文化などがありました。

しかし、今、かつての日本固有の文化は、コンクリートと鉄、そして石油の消費の上に成り立った文明に変わり、代々伝承してきた日本人の文化が崩壊寸前のように思えます。

そして同時に野生生物も減少しました。その象徴とも言えるトキは、明治大正時代に全国各地で生存していましたが、昭和初期には佐渡島で100羽前後が確認されるところまで減少し、戦中、戦後の動乱を通じて、35羽程度に激減、その後の保護活動にも関わらず、日本のトキは、“キン”1羽になってしまいました。

ニッポニア・ニッポン。日本を象徴する名を持つ国際保護鳥のトキ。このトキの野生復帰を通じて、私たちの21世紀の暮らし方をみずから問いかけるプロジェクトがスタートします。環境庁が平成12本年度より3

カ年をかけてビジョンの策定と地域づくりを行う「共生と循環の地域社会づくりモデル事業(佐渡地域)」です。

里地ネットワークは、微力ながら、これまでの調査研究や各地での取り組みと会員の皆様とのネットワーク力を活かして、この事業に取り組みたいと考えています。

事業の概要は下記の通りです。この事業への取り組みの開始は、本年8月下旬、第1回目の佐渡地域への取材から始まり、現在8回の調査と地元学の実践、佐渡の方々とかつてのトキの生息地を訪ねる散策会などを行っています。

これまでトキ保護に取り組みされてきた多くの人々、これからの佐渡を共生と循環の地域として活かす人々、さらに、国内外で、循環共生型の地域づくりに取り組みされる人々の出会いの場を持ちたいと考え、このほど佐渡島においてシンポジウムを実施いたします。

お時間の許す方は、どうぞ、佐渡へおこしてください。

**「トキの野生復帰をめざして」
共生と循環の地域社会づくりシンポジウム**
日時：平成12年11月18日(土)19日(日)
場所：佐渡島開発総合センター
問合せ：里地ネットワーク事務局

(電子メールを登録いただいている会員の方へは、11月2日お知らせの通りです)



「共生と循環の地域社会づくりモデル事業(佐渡地域)」の概要

中国から贈られたトキ一つがいより、平成11年度には1羽、12年度には2羽のヒナが誕生し、人工繁殖による個体数の増加が見込まれています。このまま繁殖が順調に進めば、近い将来、人工繁殖個体の野生復帰が可能な状況になることが期待されます。

この事業は、実際にトキを佐渡において野生復帰させるため、今年度より3カ年にかけて自然環境や社会環境の整備について、関係行政機関、団体、専門家、地域住民等の各主体が取り組むべき課題とそのための手法を明らかにし、トキと共生しうる地域社会を構築することを目的とします。

平成12年度事業は

以下の内容を予定しています。いずれも3カ年調査の初年度にあたるものです。

「佐渡地域の環境調査」

- ・文献調査による過去の生息環境の把握
- ・現地調査による生息地の現況把握
- ・調査結果の分析

「トキとの共生のための地域社会づくり」

- ・生活文化と社会環境の把握
- ・地域活動の把握と活性化
- ・「トキのふるさとづくり」計画の策定

「環境再生ビジョンの策定」

環境再生ビジョン検討委員会を設置し、上記の検討結果を踏まえ、トキが野生復帰できる環境条件、ならびに、トキとの共生が可能となる地域社会づくりのため、国、県、関係自治体、団体、地域住民等の各主体の取り組むべき課題を明らかにしたビジョンの策定を行います。

「シンポジウムの開催」

各年度にシンポジウムを開催し、地域の方々との意見交換を行いながらトキと共生するための地域社会づくりをめざします。

問い合わせ先など

環境庁自然保護局野生生物課

TEL : 03-5521-8284 FAX : 03-3581-7090
E-mail SHIZEN_YASEI@eanet.go.jp
<http://www.eic.or.jp/>

環境調査・ビジョン事務局：

(財)自然環境研究センター

〒110-8676 東京都台東区下谷3-10-10
TEL : 03-5824-0960 FAX : 03-5824-0961
E-mail nmurai@jwrc.or.jp
<http://www.jwrc.or.jp/>

地域社会づくり・シンポジウム事務局：

里地ネットワーク

〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4
西新橋YKビル6F(財)水と緑の惑星保全機構内
TEL : 03-3500-3559 FAX : 03-3500-3841
E-mail QWS04137@nifty.ne.jp
<http://member.nifty.ne.jp/satochi>

佐渡島におけるこれまでの取り組み(里地ネットワーク)

10月28日 生活文化と地域資源を調べるたんけん隊 (両津市野浦地区)

標高610メートルの大隅山山麓に降った雨が、400メートルの谷平で湧きだしています。この山と森と水をたくみに活かして広がる美しい棚田が野浦地域にあります。棚田から棚田を流れ、水路をつたわり、集落に入る山の水。人々が暮らす集落は海沿いにあり、海の幸も山の幸も人々の生きる糧です。

この野浦地区は全部で45世帯。地元学を使っての「野浦地区たんけん隊」をやろうという呼びかけに、事前の説明会から全世帯が参加。地区を挙げての「水のゆくえ」「あるもの探し」となりました。

子どもからお年寄りまでみんな長靴、子ども達は玉網をもった参加です。

開会のあいさつもそこそこに、さっそく作業開始。5000分の1の地形図、色鉛筆を前に、お母さんと子どもたちが凡例を用意します。野浦地区の特色である、棚田や竹林、それに川の状況をとらえるためにコンクリート張りの状況を凡例に加えます。

お父さんたちは、「水のゆくえ」のために水系を色を塗りります。頭を寄せ合い、小さな流れや大きな流れを確認していきます。「あそこの川はここに流れるんだろうか」と、知っているようで知らない、知らないようで知っている水の流れを地図に追いかけます。

大まかな流れが地図に落とし込まれたところで、よく知っている地区ごとに大きく4つに分かれました。大人の男の人だけでなく、おじいさん、おばあさん、おかあさん、おとうさん、子ども達...、それに、学校の先生、トキ保護センターや県庁の人などヨソモノも加わった混成チームを組みました。そして、地図、ポラロイドカメラ、色鉛筆、玉網を持ち、軽トラックに分乗して集落の裏に切り立つ山に上っていきます。目指すは水源。

すでに稲刈りは終わり、稲も干し終わって、途中のほど木には、大豆や小豆が干されています。山は深く、

あちこちから水が湧いているので、車でいけるところ



これ、なんですか？ おばあさんの知恵が生きて。

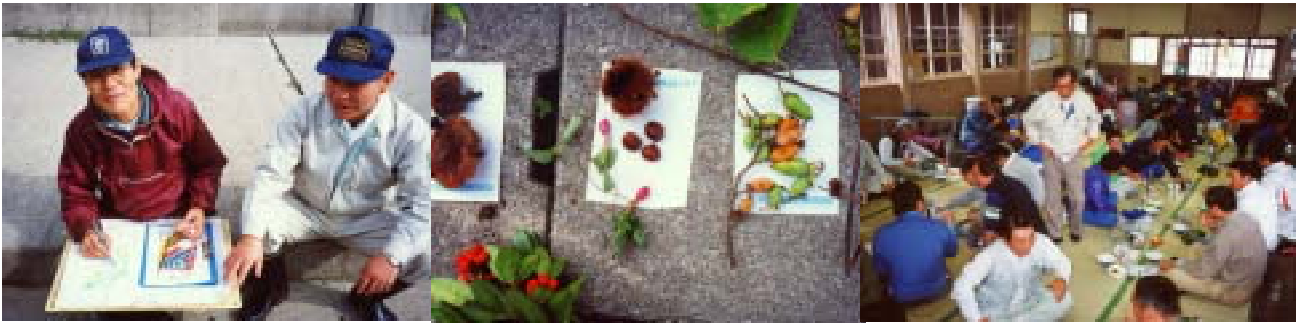
から水の流れを追いかけてきました。

佐渡の多くの集落がそうであるように、野浦地区も海沿いに集落があり、集落と海岸の間、海岸沿いに道が通っています。この道が、今、車で集落と集落を結び、集落とマチを結ぶ道になっています。そして、山には稜線沿いに林道が走り、道が山水の流れを切って作られています。

昭和のはじめまで海岸沿いの道はなく、隣の集落へ向かうのには山道を通ったと言います。また、今の林道とは違い、山の低いところを伝ってかつての道がありました。

山道は当時の子どもたちの通学路であり、仕事の道であり、モノやヒトやコトを運ぶ大切な街道でした。その街道あと、山道あとにはお地藏様が辻ごとに残っていて、道しるべとなっています。そして、たんけん隊に参加した地区のおばあさんは、お地藏様を見かけるたびに近くの花を供えては手を合わせていました。

そのおばあさんが、問題です。それまでどちらかと言えばおとなしかったおばあさんたちが、山に入った



途端、急に生き生きとしてきました。もちろん、おじいさんたちもです。

こちらがビックリして「これなに」と聞く間もなく、次から次に草木や花を採取しては、見せてくれます。これをポラロイドカメラで撮影して、「あるもの探し」も同時にすすめていきます。

かつては竹を売って生活できていたというこの地区で、「竹は竿だけでなく、竹の皮も売れたんだヨ。いいお金になった」とおばあさん。山の幸の話もたくさんでできます。

さて、それぞれのたんけん隊には「水のゆくえ」をしっかりとしようという指示がでていたので、小さな沢



でもひとつひとつ確認していききました。まずはチョロチョロとほんの少しだけ流れる沢。ここでは子どもたちが大活躍です。

ひとつずつ小石をめぐっていきます。するとサワガニがあらわれてきました。「ばあちゃん、ばあちゃ、バケツ、バケツ！」と子どもたちの叫ぶ声が沢に響き渡ります。大きいものは甲羅の幅が4 cm ほど。「イタタッ」と声を上げるのはサワガニに指を挟まれてしまったおとうさん。サワガニをとった沢にはクルミも落ちていました。沢のすぐ横には大きなクルミ木が立っていました。「昔は競ってクルミを拾ったものだけど、今は拾わないね。昔を思い出すねえ。」



午前中の活動を終え、各チームそれぞれいろいろな収穫物を持って戻ってきました。

紅葉した葉のついた木々、ドングリ、栗、薬草、アケビ等々。他のチームのみんなに見せるまでは「食べちゃダメ！」ということでしたが、アケビの中身の無いものも……。

各班が採取してきた宝物を品定めをしてから昼食会です。

各自持参のお弁当ですが、野浦地区のお母さん達が作ってくれた豚汁がふるまわれました。そして、みんなが持ち寄ってきたお弁当をお裾分け。「目の前の海で採れたイカだよ。うまいぞー」。自家製の漬け物、柿、煮豆…。「いやー、歩いて疲れたねえ。疲れを取るには、やっぱりコレがなくちゃな」。赤い顔になってしまったお父さんもいましたが、午前中に体験したことの情報交換に話がはずみました。

左・いざ出発。石積み道の裏道。右・タコをとる道具



午後からは野浦の集落を探検します。

家の裏の畑には、この時期なのにトマトやナス、トマトなどの夏野菜をはじめ、白菜やカブ、ダイコンなどの秋冬野菜、来年収穫するジャガイモ、ユズや柿といった果物、それに、お供えに使う花など30種類を超える作物が育てられていました。「今頃のトマトは赤くならないから、酢漬けにして、カレー粉をまぶして食べるとサラダになる」とはおばあさんの知恵。ほとんどの野菜が自給できるそうです。

家の倉庫や納屋をのぞくと山の道具、海の道具、農機具など海のモノから山のモノまで、古いのも新しいのも次々にあらわれます。

「前の海は、おかずの海だよ。さっと潜ればすぐにサザエが採れるからね。」

「タコも捕れるよ。魚の頭を餌にした棒と引っかけて取るための棒と、2本で取るんだ。」「棚田の米はうまいよ。粳はあそこに保管するんだよ」と、そこには漢数字や数字が書かれた木製の大きな引き出し。味噌を昔ながらの木桶で作っている家あり、豆腐や醤油を手作りする道具なども大切に保管されていました。さらに、今年採ったという笹の葉は、殺菌効果もあるため、ラップがわりに使うそうです。のきには洗濯ばさみが



ずらりとならび、イカやワカメなど、たくさんとれたらいつでも干せます。柿を干している家、タマネギを干している家、大豆、小豆、カヤの実、クルミなど、山の幸、畑の幸、海の幸が、乾燥した気候の中で保存食として大切に干されていました。



上・モミを保存するタンス。下・クルミ削り

公民館に戻ってからは、ポラロイドカメラで撮影した写真をもとに、「地域資源カード」をつくっていきます。聞いた話だけではなく、その場で分からないことを、知っている人を探して聞き出します。さらに次々に古くて新しい話が、1枚のカードをきっかけに広がって、広いとは言えない公民館が熱気に包まれました。

4つの班は、それぞれ歩いたエリアの地図をつくり、「水のゆくえ」を完成させます。あるもの探しの「地域資源カード」は、生活、水、田畑、神様などテーマ別に分けてずらりと並べ、みんなで野浦の豊かさ、「あるもの」を確認しました。最後に、班の発表と参加したヨソモノが驚いたことを発表して、かけあしの探検隊が終了しました。

地元の人も、ヨソモノも、みんなが野浦を発見した1日。「水のゆくえ」地図と「地域資源カード」はそのまま野浦地区に残り、これから積み重ねられていくことでしょう。参加した小学校の先生は、これを活用して学校での教育活動に活かしたいというお話しでした。



10月29日 トキの生息地をたずねる調査 & 散策会 (新穂村清水平、生椿地区)

かつて残り少なくなったトキが暮らしていた生椿地区周辺。この集落は海沿いではなく、ずいぶん山に入ったところにあり、静かで夏でも涼しい山の集落です。かつては9戸ほどの家があり、10数年前からは人が住まなくなりました。しかし、かつてこの集落に住んでいた人たちは、今でも棚田で米をつくったり、野菜をつくるために新穂村のマチから通っています。

トキが生椿地区を好んだのは、最後まで生椿で暮らしていた故・高野高治さんが、トキのために農薬使用を避け、生椿の人々に呼びかけて、トキとの共存を模索したからです。

この生椿地区と今は使われていない旧トキ保護センターは山の反対側にあります。

そこで、この旧トキ保護センターから生椿までを歩き、生椿地区に残る生活の知恵を学ぶ「かつてのトキ生息地を訪ねるハイキング」を開催しました。この催しに、子どもからお年寄りまで60名ほどの参加者が集まりました。

あいにくの曇り空、今にも雨が降ってきそうな天気です。

まずは、旧トキ保護センターから生椿地区までの地域の自然を調べながら歩く「たんけん隊」の結成です。動物班、植物班、昆虫班、野鳥班に分かれ、詳しい人、興味のある人がまとまって行動できるようにしました。各班には、地図と色鉛筆が渡され、発見したものを地図上に記入していきます。

旧トキ保護センターと言っても、今はひとつの建物をのぞいてほとんどすべて解体されたり、朽ちたりしています。かつての田んぼは荒れましたが、池や樹木はそのままだに水鳥や魚、ザリガニ、虫、多くの植物が当時をしのばせます。さっそく、昆虫班の子ども達が玉網で池をさらい、アメリカザリガニやカワニナを確認。地図に書き込みました。また、動物班からは、タヌキが貝を食べたあとがあったこと、野鳥班からはキンクロハジロ、マガモ、カイツブリがいたことや、水



鳥の巣のあとなどの発見が伝えられました。

当時の旧トキ保護センターの運営については、佐渡とき保護会の佐藤春雄さんが話をしてくれました。電気も引かれない中で、トキを観察し、山の反対側の生椿地区からは、生椿でトキを大切にしていた故高野高治さんが毎日、自分で養殖したドジョウなどをついで山をこえ、エサを届けに来ていたことなど、トキのいのちの鎖を守ろうとした人達のエピソード



長年トキの保護を続ける佐藤春雄さん



ードが語られました。

そして、その故高野高治さんが毎日通ったという山に入ります。

旧トキ保護センターの周辺は杉の植林がされています。植林後30年以上を越えているそうですが、大きく育った杉は伐期を迎えています。その杉林の地面には、山菜のミズの群落です。生樺までは、それぞれの班で観察しながらのハイキングです。

雷でまっばつに割れたまま立っている杉の大木。紅葉した木々、山道のすぐそばの木々や地面からキノコが顔を出しています。「キノコに詳しい人オ〜」と叫ぶ女性。「マイタゲがあるはず」と、栗の木があるたびに根っこを回る男性。食べものの存在は、人の気持ちを高揚させるようです。

木の枝が真っ白になっていました。ロウムシで虫が作り出し、昔はロウの代わりに戸などをすべらすのに用いたそうです。

タヌキやテン、イタチと思われる糞もたくさん発見。中には食べたマタタビの形がはっきりとわかる糞もありました。これら糞も収穫物として採取され、フィルムケースの中に入れて、みんなの前へ運ばれます。

かつてトキが飛んでいた谷を眺められる尾根には、観察小屋がありましたが、野生のトキがいなくなったあとはそのままに置かれ、まわりの木々が成長して観察窓か



杉林を歩いていこう。2時間のハイキング



ら谷を見ることはできません。時間の流れを感じさせます。

山を登り、そして下って2時間ほどで生樺地区に到着しました。ゆっくりとしたペースとはいえ、旧トキ保護センターと生樺の間はなかなか大変な道のりです。

「長かった。高野さんはここを毎日往復していたなんてスゴイ!」という声。

生樺地区では、故高野高治さんの息子の高野毅さん、大島汎さん、鈴木岩夫さんの3名が私たちの到着を待っていました。

人が住まなくなった生樺地区にある建物は、最後まで暮らしていた高野毅さんの家と納屋。納屋は今でも

農業用の道具などを置くために使っていますが、使わなくなった茅葺き屋根の家は半分朽ちています。でも、抜けた壁から見る部屋の中は囲炉裏があり、古いカマドがあります。とてもわくわくしてきます。

そこで、今度は参加者が3チームに分かれ、3人の生樺の人と一緒に地籍が入った地図を持ってたんけんすることになりました。

水はどこから引いて、どこに行くのか。山の暮らしはどんなものだったのか。トキと人々はどんな付き合い方をしていたのか。雨の中、参加者と生樺の人が自然や田畑と向き合って対話していきます。



そうです。「トキも腹を空かしているんだから、追い払ってはいかん」と。その教えは、高治さんの息子の毅さんをはじめ生椿の人々に受け継がれ、トキの餌のドジョウを購入してきて、水を張った田んぼに放し、冬場のエサとしました。

「驚かせないように、田んぼにトキが降りていたら、作業をやめて遠くで見ている」

「生椿は家は別々に建てていたが、みんな家族のようなものだった」

生椿の人々は、70年代

水は沢の奥から引かれ、生活水と農業水に分けて流れていました。田んぼの真ん中から水が湧き出しているところは、沼になり、かつてのトキのエサ場となっていました。

電気はなく、郵便は届けられない、基本的な暮らしは、この土地がすべてです。

それでも、「もし、電話や電気が通じるのなら、ここで暮らしたい。水がきれいで、空気がきれいな生椿で暮らしたい」と、案内の方がつぶやきます。

トキと人間の付き合いを生涯追い求めた高野高治さんは、そのお父さんから「トキは友達」と教えられた

に、それぞれの家で子ども達が小学校に通い出すのをきっかけに、親元で育てたいとの思いから、生椿を離れました。それでも、棚田を通じて生椿とのつながりは捨てずにいます。代々受け継がれてきた知恵を誇りに、自分たちが生椿で生きた証を伝えたい。そして、いつの日かまた友達のトキが大空から生椿の棚田に舞い降りることを願って、今も生椿での棚田での耕作とドジョウの飼育を行っているそうです。

トキと人の共存というテーマに、この生椿地区の歴史と人と自然が答えを持っているような気がしてなりませんでした。

写真は生椿地区の棚田にある水の湧く湿地。

かつては水田だったが、その後、トキのエサ場として冬も水を張っていた。

今も、そのままに湿地としてある。

いつでもトキが帰ってこれるように。

今年度の地域新エネルギービジョン事業

岩手県湯田町で昨年お手伝いさせていただいた事業に、NEDO(新エネルギー・産業技術総合開発機構)が全国の市町村にビジョン策定の事業費を助成している通称「新エネビジョン」があります。本年は、このビジョン策定事業を、福島県大玉村で、里地ネットワークの団体会員である(有)アートパークと(有)バーグ・プラン研究室とともに開始しました。三者の役割分担のうち、里地ネットワークの主な役割は、地域の潜在資源の掘り起こしと事業の組み立てです。大玉村には、かつて大玉村をはじめとして周辺地域にも電力を供給していたという小さな水力発電所が2カ所ありました。山から木を伐りだし運搬するためのトロロコ軌道が全長20キロメートル弱にわたってあったことも分かりました。この他にもさまざまな地域資源が豊富に見つかり、地域の豊かさに驚き感心させられました。

秋の稲刈り後の米の干し方は、地域内に森林や竹林が豊富にあるのにも関わらず、横に長く一列に並べる「牛や馬」などといわれるハザカケではなく、一本の棒に円形に掛けていく「棒掛け」という干し方でした。この棒掛けは、風が強く稲が乾燥しやすい地域でおこなわれる方式ということもあり、風の調査を念入りに行ったところ、谷風の通り道や、山麓から里に入ってきた風が再び丘陵にあたる手前の風が圧迫される地域では、常時強い風が吹いていることも分かりました。地形図を使い、瓦や看板が飛ぶ地点を調べ、集落の防風林の影響を受けない田畑の広がる空間などがある地域では、平均風速をはるかに超える強さの風があることも分かりました。

エネルギーの生産方法は、弱いながらも240日を越えて吹いている風を活かすか、強いけれども、120日前後しか吹かない風のどちらが有効なのかの試算。

かつての水力発電所や、現在の農業用大規模貯水池(落差26メートル、湖面の面積7.4ヘクタール)の活用、常時水が流れている棚田の農業用水の活用。地

底深く、または山奥に湧く温泉の地熱、牛糞や鶏糞の活用、もちろん、雪の降らない大玉村ですから、ソーラーなどと、さまざまな可能性がもちあがってきました。送電線を全国に張り巡らせたことで、安定かつ安い電力が供給できている現在、この電力料金やガス、石油料金と、地域自給的なエネルギーの生産や活用は、初期投資を本来考えないで、運営コストのみで比較考量しないと、これまでの原子力や火力への投資と見合わず、おかしな比較になってしまいそうです。

日本のエネルギー政策の中で大胆な考察と推進が必要な今、自治体レベルでの短期的なコスト計算ではない、将来を見据えたクリーンなエネルギーへの投資が、急務のように思えます。

今年度、里地ネットワークの事務局では、実際に発電所を設置した場合のコストは、いくらぐらいなのか、大きな風車の設置から家庭で設置できる程度の規模の風車まで、大玉村の地域新エネルギービジョンを通じて考えていきたいと思えます。

さらに、本年刊行した「里地からのチャレンジ100事例集」の充実を併せて行う一方、環境保全型の技術情報を引き続き収集しています。ぜひとも、さまざまな情報を事務局までお届けいただければ幸いです。

『地球温暖化対策から始まる元気な地域づくり ～里地からのチャレンジ100事例集～』



1000円(税込)+送料310円

申込は、FAXまたはメールにお名前、ご住所、連絡先(電話、FAX、e-mail)をお書き添えの上お願いします。折り返しご連絡いたします。

FAX: 03-3500-3841

里地ネットワーク推薦書籍のご案内

『朱鷺の遺言』

【著】小林照幸【版元】中央公論社(1998年4月出版)349p、2200円+税

ニッポニア・ニッポン 日本を象徴する名を持つ、哀しいまでに美しい鳥・トキ。かつて日本全土に生息し、昭和初期に至っても佐渡には約100羽が生息していたが、今や最後の1羽が飼育されるのみとなった。戦後の混乱期、トキ保護に立ち上がった人々は、手さぐりの生態観察、困難な餌の確保、進展しない保護活動等々、苦闘の日々を辿らねばならなかった。

トキを慈しみ、トキと響きあって生きた男たちの足跡を佐渡に追い、「人間」と「自然」の相剋・共生を問う。

『多様な生物との共生をめざして - 生物多様性国家戦略』

【編】環境庁自然保護局【版元】大蔵省印刷局(1996年5月出版)201p、1748円+税

- 第1部 生物多様性の現状
- 第2部 生物多様性の保全と持続可能な利用のための基本方針
- 第3部 施策の展開
- 第4部 戦略の効果的実施

エネルギー関連

『北欧のエネルギーデモクラシー』

【著】飯田哲也【版元】新評論(2000年)262p、1200円+税
「風力電車が走る! グリーン電力の登場とスウェーデン電力市場改革 / 「化石燃料ゼロ」を宣言した町 スウェーデンのローカルアジェンダ / 脱原発に挑戦するスウェーデン / 風車を共有する人々 / 自然エネルギー自給を目指す島々 アイルネットと欧州の再生可能エネルギー戦略 / 不安の時代を超えて 「エコロジカルな民主化」に向けて ほか

『2010年自然エネルギー宣言』

【編】「自然エネルギー促進法」推進ネットワーク【版元】七つ森書館(2000年)100p、1000円+税

- 第1章 2010年自然エネルギー10パーセント戦略
- 第2章 導入拡大のための政策ツール
- 第3章 普及拡大の技術課題
- 第4章 初期導入のキャンペーン ほか

里山関連

里山の雑木林など身近な森へ出かけ、森を手入れし、森で遊ぶアイデアなどを豊富なイラストで楽しく読める本を集めてみました。

『イラスト 里山の手入れ図鑑』

【監修】中川重年【イラスト】長野亮之介、高橋美江【編】(社)全国林業改良普及協会【版元】(社)全国林業改良普及協会(2000年)100p、1200円+税

『里山の雑木林

～みんなで活かそう、くらしの森』

【編】(社)全国林業改良普及協会【版元】(社)全国林業改良普及協会(2000年)64p、1000円+税

体験セミナーシリーズ・イラストガイド

『森の手入れ・森のあそび』

【著】中川重年【イラスト】鶴岡政明【版元】(社)全国林業改良普及協会(1997年)96p、1000円+税

『森の知る、森を楽しむ』

【著】中川重年【イラスト】鶴岡政明、長野亮之介【版元】(社)全国林業改良普及協会(1998年)92p、1000円+税

『まちの森生活 - ソフト林業入門』

【著】中川重年、しまだ・しほ、鶴岡政明、長野亮之介【版元】(社)全国林業改良普及協会(1998年)92p、1000円+税

イベント・セミナーご案内

民族文化映像研究所

姫田忠義による「映像と基層文化」論

民族文化映像研究所アチック・フォーラム20周年記念特別プログラム～民映研 未来へのメッセージ～

12月のテーマは、『猿も家族である！基層文化の驚異 4 猿まわしの復活、野生との共生、芸能』

12月1日 映画『周防猿まわしの記録』(80年)

12月8日 日本の詩情(監修:宮本常一、シナリオ:姫田忠義、製作:日経映像)より『雪の中に生きる山古志(新潟)』(65年)、映画『越後二十村郷・牛の角突き』(81年)、映画『山に生きるまつり』(81年)

12月15日 テレビ番組『浜美枝・ピレネー讃歌』(89年・テレビ朝日)より「伝統的バスクの鳩狩り」、映画『アマルール 大地の人バスク』(81年)

12月22日 姫田忠義 講義(12月の総括を含む)

会場:民族文化映像研究所

日時:毎週金曜日 18:30開場 19:00開始

参加:月会費制(当日空席ある場合のみ1回鑑賞可)

問合せ:民族文化映像研究所アチック・フォーラム
〒160-0022 東京都新宿区新宿2-1-4 御苑ビル2 階

TEL:03-3341-2865 FAX:03-3341-3420

<http://www.tk.xaxon.ne.jp/mineiken/>

牛久自然観察の森

毎月のイベントとして、竹細工教室、植物観察会、バードウォッチング。毎週日曜日・祝日にはミニ観察会。奇数月の第4土曜日には自然なんでもたんけん隊。四季それぞれには心絵日記教室。その他テーマ観察会が行われています。

場所:茨城県牛久市 牛久自然観察の森

問合せ:牛久自然観察の森

TEL:0298-74-6600 FAX:0298-74-6812

<http://www.net-ibaraki.ne.jp/ushiku-v/>

財団法人キープ協会

自然と遊び、牛を飼うたいけんキャンプ

『冬毛のジャージー牛と過ごそう!』

キープフォレストーズ・スクールのレンジャーと、キープ農場の牛飼いによる、自然&酪農ダブル体験キャンプ。酪農体験の中身は、牛舎掃除や放牧地への牛の誘導など本物の牛飼いの日常管理作業です。(第5回)

日時:12月9~10日(土・日)

対象:小学生以上一般

参加費:大人13000 / 中~大学生11000 / 小学生10000

問合せ:キープ・フォレストーズ・スクール

TEL:0551-48-3795

<http://keep.or.jp/FORESTERS/>

森の教室

冬は雪景色が美しく薪ストーブと人の輪が温かい季節です。窓の外の美しい雪景色を眺めながら温かい室内で工作したり、料理教室をしたりします。

第1回 12月8~10日(金~日)

第2回 12月22~24日(金~日)

以上バードフィーダー・バードウォッチング

第3回 12月29、30日(金・土)

第4回 12月30、31日(土・日)

以上そばうち(ふるさとの味教室)

第5回 1月26~28日(金~日)

工作色々・冬の森ウォッチング

第6回 2月3、4日(土・日)

輪かんじき・アニマルトラック

第7回 2月10~12日(金~日)

ぞうり・ほうとう作り

第8回 2月17、18日(土・日)

第9回 2月23~25日(金~日)

以上輪かんじき・アニマルトラック

問合せ:キープ自然学校

TEL:0551-20-7701

横浜自然観察の森

正規レンジャーの他ボランティアが様々な活動に主体的に参加・運営しています。最近のイベントとしては、エンジョイ！ネイチャー講座、自然案内人入門編、森づくり入門講座、季節の森を歩こうなど。

場所：横浜市栄区 横浜自然観察の森

問合せ：横浜自然観察の森

TEL：045-894-7474

<http://www.kt.rim.or.jp/%7Ewbsjsanc/>

地球デザインスクール

京都・丹後・天橋立のそば、海に面した里山で手づくりエコトピアに挑戦中。食やエネルギー、森づくりなど里山の資源を活用したイベントが盛りだくさん。

石臼・石窯・パン焼き教室 12月16、17日

問合せ：地球デザインスクール事務局

TEL：075-417-3147 FAX：075-431-8376(担当：広瀬)

<http://www02.so-net.ne.jp/earth-d/>

第1回「学聚会」記念シンポジウム

自然から教えてもらおう、明日の生き方を
～これまでの50年、今日からの50年～

会長のC.W.ニコル氏、理事長の池田武邦氏の話を中心に日本の自然、自然と共生する文化について振り返ってみたいと思います。これから先、私たちはコンクリートの森の中で生きていけるのか、21世紀の日本の自然そして私たち日本人のあるべき姿について、みなさんと考えていきたいと思います。

日時：12月16日(土) 受付13:00～

場所：はあといん乃木坂(健保会館)ホール

問合せ：樹木・環境ネットワーク協会

TEL：03-5366-0755

<http://shu.m78.com/>

地球温暖化防止月間行事

ストップ地球温暖化2000 in ひょうご・神戸

未来の世代、明日の地球のため、今すぐ暮らしを変えましょう。私たちが変わらなければ地球温暖化はSTOPしません！

地球温暖化防止活動事例発表会、エコカー展示・試乗会、フリーマーケットなど

地球温暖化防止シンポジウム 13:00～

『地球温暖化防止のために、私たちができること』

「未来の世代から、地球賛歌」子どもたちのアピール・合唱 / 基調講演「地球温暖化と私たちの暮らし」鈴木胖・摂南大学工学部電気工学科教授 / パネルディスカッション

日時：2000年12月10日(日)

場所：ポートピアホール・神戸国際会議場

主催：環境庁・兵庫県・神戸市

問合せ：(財)水と緑の惑星保全機構

TEL：03-3503-7743 FAX：03-3503-7808

農林水産環境展

農林畜水産業と農山漁村における環境と調和した技術・商品・システムを一堂に展示し、農山漁村人と環境に調和した「循環型社会」の構築に寄与することを目的とした日本で初めての展示会です。里地ネットワークも出展します。ブース No.711です。皆さんのお越しをお待ちしています。

日時：2000年11月29日(水)～12月1日(金) 午前10時～午後5時(最終日のみ午後4時まで)

場所：日本コンベンションセンター 国際展示場(幕張メッセ・展示ホール)

料金：一般1000円、学生500円(高校大学)、団体800円(10人以上)

同時開催：ウェステック2000、河川環境展2000

問合せ：農林水産環境展実行委員会事務局

TEL：03-3359-5349 FAX：03-3359-7250

<http://www.kankyo-news.co.jp/efaff/index.html>